「岡山ペパーランド ライブレポート」

Live Report

Text by 川上卓也

kashi no kai

１０月１０日、岡山ペパーランドで行われたかしぶちさんのソロライブ。私は今回のツアーは、９月２６日の南青山マンダラに続いて２度目である。

１９時、準備の都合で開場が遅れる。

会場前で並んでいると、スタッフや出演者が頻繁に出入りするが、かしぶちさんが出てきても誰も取り囲んだり声をかけたりすることもなく、みなさん大人だなあという印象。

東京ローズの上田さんがいたり、会場内からリハーサルの音が洩れてきたりで、少しずつネタがばれてしまうものの、逆に期待が高まる。

結局開場は１９時４０分頃。初めて入ったペパーランドは思っていた以上に小さくて、開場と同時に立錐の余地もない状態になり、開演前から熱気ムンムン。ステージ後ろのスクリーンには、ライダーズのライブ映像等が映し出されている。

まずはオープニングに架空楽団が登場。

なんと、昔のライダーズのようなディーヴォのヘルメットをかぶっている。ただし、普通のバイクのヘルメットに手作りのフェースをつけただけのつくり（のように見えた）。１曲目「ビデオボーイ」、２曲目「YBJ」と硬質なサウンドを聴かせる。ヘルメットのチープな感じと音のかっこよさとのギャップがたまらない。馬鹿なことをやって笑わせつつも音楽であっと言わせる、その心意気まで含めてのコピーバンド、とでも言えばよいだろうか。

続いて「グルーピーに気をつけろ」、そして「SweetBitterCandy」の計４曲やって退場。バイオリンやコーラス隊まで加わった夏のライブに比べると小じんまりとした編成だが、パワフルな音でのびのびとした演奏だった。特に、トランペットが入っていることで、普通のバンドサウンドとは違うライダーズテイストが出ていたと思う。１本のトランペットがバンドの音をどれほど豊かなものしてくれることか、なんてことを考えて、ライダーズにおける武川さんの存在の大きさを改めて感じてしまったりして。

続いて、いよいよ本日の主役かしぶちさんの登場。

キーボードの板倉さんと二人で５曲ほど。かしぶちさんはギター。ここらあたりは、マンダラと同じメニュー。かしぶちさんの弾き語りを板倉さんのキーボードがデコレートする、といった感じの比較的シンプルなアレンジで、かしぶちさんのボーカルが際立つ。「柔らかいポーズ」のイントロ、アルバムではストリングが奏でているフレーズをキーボードでやったのがとても印象的で良かった。

「FrouFrou」はライダーズが派手にやるとそうでもないんだけど、こうしてアコースティックギターにのせて歌われると、かえってイヤラシサが増すような感じ。

「愛のコロニー」については、あるアイドルのために書いた曲というだけで、そのアイドルが誰なのかということも曲のタイトルも確か言わなかった。マンダラでやったときは、ある少女のために作ったという言い方だったけど、そのときは曲名ははっきり言ってくれた。で、曲名さえ分かればこっちのもん。家へ帰って「２０世紀のムーンライダーズ」の提供楽曲リストを繙いてみると、アーティストの欄には岡田有希子の名が。なるほどなるほど。こんなことまですぐ調べられるとは、便利な世の中になったもんだ。もう一つ、「リベルテ」は globe のマークのアイドル時代に書いた曲だとのこと。

ここで板倉さんが退場し、上田さんがステージへ。

「オブジェの花」、「エゴイスト」、「恋のためらい」、かしぶちさんが順に曲紹介をしたんだけど、終わってみればコメントはどれも「かなりエッチな曲」。「みなさんそれに耐えられるかな？」と言って始まり、マンダラではかしぶちさんが一人で歌ったこの３曲を、上田さんとデュエット。

上田さんが退場すると、かしぶちさんはキーボードに向かう。

ピアノ弾き語りによる「S.E.X.」と「砂丘」。この演奏と歌がとても素晴らしかった。会場中が静かに聴き入っていたし、私ももっともっと聴いていたかった。しかし、この取り合わせってよく考えると凄いようなあ。かしぶちさんの世界の両極端て感じじゃなかろうか。この日たった一人で演奏したのはこのコーナーだけだったわけだし、この２曲を、この２曲のみを選んだというのは、ねらってやったことだったのかもしれないな、なんて気もしてしまう。

そして、板倉さん、上田さんが再登場して、東京ローズ。

「BirthVision」は、２日前にホテルで書き上げたという板倉さんの新曲。独特の曲調に合わせて上田さんも独特の唱法を披露。何と表現すればよいのか、アジアンボイスとでも言っておこうか？？？出来たての曲というわりには、既にかなり凝ったアレンジに仕上がっている。板倉さんのボーカルも聴けた。東京ローズ、もう１曲の「花のイマージュ」は、前回のライブでもやった名曲。

上田さん、板倉さん退場……と思いきや、かしぶちさんが「板倉君は降りちゃ駄目だよ」と慌てて呼び戻す。「今までは東京ローズのキーボードで、ここからはソロかしぶち哲郎のキーボード」とのこと。そういえば、東京ローズのコーナーに入るまでは板倉さんと上田さんは入れ替わりになっていて、３人が同時にステージに立つことはなかったんだな。３人が勢揃いするのはあくまでも東京ローズのときだけ、という意図があったのかも。

後で知ったことだが、当初はここで「永遠のエントランス」をやる予定だったらしい。それで板倉さんは引っ込みそうになってしまったのか。かしぶちさんの朗読による「永遠のエントランス」も貴重だと思うんだけど、これはマンダラで聴けたからまあよしとしよう。

で、かしぶちさん、板倉さんの二人で「DeuxCiels」と「クリニカ」。「クリニカ」を二人でやるのは無謀だ、と言っていたが、しかも音に関しては二人どころかほとんど板倉さん一人の大活躍。思いの外オリジナルに近い雰囲気が出ていたし、ボーカル付きバージョンが生で聴けて満足。

板倉さんが退場し、かしぶちさんがゲストを紹介！ …する前にカーテンがめくれて石原さんの姿が見えてしまう。というわけで、今度はゲストとして架空楽団が再登場。夏の架空楽団ライブに続いて、かしぶちさんボーカルによる「プラトーの日々」。今さらながらに改めて感じたことだが、これが本当に難しそうな曲である。にも関わらず非常に安定した良い演奏。さらに、はちみつぱいの「釣り糸」。この辺りは、架空楽団のバックならでは、という選曲の妙。特に「釣り糸」は、ライブのために練習したというよりも、昔から好きな曲だから改めて練習なんかしなくてもいつでもそらで弾けちゃうんだぞ、とでも言いたげなこなれた演奏。このとき初めて感じたことだが、「釣り糸」の間奏は一瞬、「月面讃歌」に似ていないだろうか？？？

そして、かしぶちさん以外の人の作ったライダーズナンバーの中から、かしぶちさんの好きな曲を選んで歌って貰おうという趣向。かしぶちさんが選んだのは「青空のマリー」だった。客席もいっしょになってコーラスに参加しながら、珍しい（初めて？）かしぶちさんボーカルによる「青空のマリー」を堪能。架空楽団黒瀬オーナーのアイデアの勝利。

どの場面でだったか記憶が定かではないのだが、この日かしぶちさんから、「夢が叶って架空楽団と共演出来た」という発言まで飛び出した。架空楽団の皆さんは「それはこちらのセリフです」と恐縮しまくっていたが、これだけ素晴らしい選曲と演奏で楽しませてくれたのだから、ライダーズファンにとっても夢の共演である。夏のライブは、あくまでも架空楽団のライブにかしぶちさんがゲストで出演したという形だったが、今回はかしぶちさんのライブのバッキングを架空楽団がつとめてしまったのだから、これは本当に凄いことではないだろうか。

架空楽団が退場すると、再び板倉さんと二人で、夏のライダーズのツアーでは演奏されなかった「君には宇宙船がある」と「服を脱いで、僕のために」。アルバムとは全く違ったシンプルなアレンジで、楽曲の良さに改めて気づかされる。「服を脱いで…」は、間奏が「月面讃歌」のフレーズに変るという心憎いアレンジ。

続いて、かしぶちさんのルーズなボーカルで始まる「バックシート」、そして「リラのホテル」。再び上田さんも登場し、観客もいっしょになって「O.K.パ・ド・ドゥ」。最後は、静かな弾き語りによる「Beep Beep Be オーライ」。

これで一応本編は終了のようだったが、会場には、いよいよこれからだとでもいうような熱い期待の入り混じった空気が漲る。

アンコールではかしぶちさんが、「リクエストなんてありますか？」と言い出すが、「紡ぎ歌やって下さい」の声に拍手が湧くと、「今の話はなかったことにして下さい…」。かしぶちさん曰く「一番遠いところが出てきちゃった」とかなんとか。じゃあ、一体どの辺りを想定していたのかというのが気になるところではあるのだが…。

というわけで客席からの熱烈なリクエストに応えて、マンダラでもやった「火曜日はベルギーよ」。続けて、上田さんボーカルによる「アイドルを探せ」とカバーを２曲。

またまた架空楽団が現れて、ここからは怒涛のラストスパート。正直言って、この辺からは興奮しててあんまり細かいことは憶えていない。「スカーレットの誓い」でボーカルを取ったかしぶちさんは、次はドラムへ移り「Happy/Blue'95」。再びフロントに出てきて、客席のコーラスとともに「ひまわり」を歌うと、途中でまたもやドラムに移動。そしてなんとドラムソロ。これがとにかくもの凄い。ライダーズのライブでも聴いたことのないようなハードなドラムを存分に披露、圧巻。さらには片島さんにも回してのドラムバトル。この日一番幸せだったのは片島さんかも。

当初の予定では、恐らくこれが本当のエンディングのはずだったのではないかと思うのだが、再び湧き上がった拍手が鳴り止まず、かしぶちさんがステージへ。「今、袖で何やるか相談してますから。僕は何でもいいんだけどね」って、こんなこと架空楽団のバックがなきゃ考えられないよな、と贅沢な期待が膨らむ。かしぶちさんがドラムを叩きたいということで、曲は「BEATITUDE」に決まり。歌詞に不安のあるらしい山田さんが、客席に歌詞の指導を求めつつ始まったが、そんな心配は全く無用で、会場中が大合唱。

拍手がいつまでも止まず、とてもこのままじゃ終れないような雰囲気の中、客席後方に出て来た黒瀬さんが、ライブの終了と打ち上げ準備開始を宣言するに至って、大興奮もようやく収束。このとき既に２３時３０分を過ぎていたと思う。

その後は、同じ会場で打ち上げ。出演者、スタッフ、観客合わせて４０人ほどが参加。それぞれ簡単に自己紹介をするが、岡山以外からの参加者が随分多い。

いくつかのテーブルに分かれてライダーズ話に花が咲く中、かしぶちさんは各テーブルを回ってくれたので、めいめい話をしたり、サインを貰ったり、いっしょに写真を撮らせて貰ったり。そうしている間にも、石原さんがギターを手にライダーズナンバーを歌い続けるという、何とも贅沢な BGM。

かしぶちさんがトイレに入ったところで、ギターを持った黒瀬さんが「かしぶちさんにも歌って貰おう」とトイレのドアに張り着くようにして、「D/P」のイントロを弾く。「嫌がらせだー」の声が飛ぶも、黒瀬さん曰く「かしぶちさん喜んで歌ってるよ」。果して本当にかしぶちさんがトイレの中で歌っていたのかどうか、それはかしぶちさんと黒瀬さんのみぞ知る、なわけだが、用を済ませたかしぶちさんは、ステージに上がってきっちり「D/P」を歌ってくれました。というわけで、これがこの日の３１曲目。その後、打ち上げは４時頃まで続いた。

ざっと振り返ってみても、この日のライブは、架空楽団の登場からアンコールの最後の最後まで全編これ見せ場、といった感じで、見所を挙げていったらきりがない。皆で盛り上がっての大合唱はもちろん、ピアノの弾き語りに静かに聴き入っているときでさえも、常にハイテンションのクライマックス。言ってみればこれは、かしぶちさんが私達に贈ってくれた「プラトーの夜」なのだ。

そして、この日一番強く感じたのは、かしぶちさんのサービス精神の旺盛さと気さくな人柄。これまで私は、かしぶちさんというとクールで頑固なドラマーというイメージを勝手に抱いていたのだが、この日見たかしぶちさんは、ライブの中での黒瀬さんとの会話でも言われていたように「頼まれたら嫌とは言えない」サービス精神の塊のような人だった。多謝！

※HP 掲載に当たりオリジナル原稿より改行位置変更させて頂きました。
（樫の会 KRAFT.WARTZ)